

LACAN 理論に於ける ‘le réel’ 概念について

丸山 明

まえがき

今日、精神医療の現場では様々な精神療法が行われている。そしてそれらの療法はそれぞれに応じた理論的背景を持っている。そうした多くの理論の存在は人間理解に関連して様々な視点があることを示していると言える。ある理論は個人と状況との関係を重視し、また他の理論は個人の内面の探究に重きを置く。だが、どちらにしても精神療法を名乗る限りは、最終的に個人の問題を解決するための理論であることに変わりはないはずである。そこに違いがあるとすれば、それはこの「解決」をどう考えるかの違いである。

「治療とは何か？」という問いは精神療法に付きまとう問いである。しかしながら、この問いを突き詰めていく内に更に新たな問いが生まれてくることに誰も気付くはずである。定義から問いへ、問いから定義へと問いは問いを産み続ける。このように、定義と問いとは表裏を成してメビウスの輪を作り上げている。

ここで、この同義反復を抜け出すために「問いとは何か？」と問うてみるのはどうであろうか。これは究極の問いと言えよう。確かにこの問いが問いである限りに置いて、この問いは問いの答を差し出すものではないであろう。しかしながら、問いの性質そのものを解明するということは治療という観点から見ても重要な問題なのである。

精神療法という分野に於いてこの問いを最初に発したのは Freud である。周知のように彼は夢という題材を用いて無意識の探究を試みたのであるが、「圧縮」と「置き換え」という夢

の法則は、その後 Lacan によって「隠喩」と「換喩」という文法として捉え直されることになる。「無意識は言語のように構造化されている」という Lacan のテーゼはここに由来するのである。このように無意識を言語として捉え直すことは無意識を科学の対象とすることを可能にする。しかしながら、無意識に「夢の隣」と呼ばれる暗点が存在したように、言語に於いても一つの暗点が残され続けている。それは「問い」という形を取りながら名付けえぬ領域を示し続けているのである。そして名付けえぬ領域こそが、本論文で問題にする ‘le réel’ (現実界) と呼ばれるものである。

本論文は二部構成である。まず第 I 部は Lacan と Freud を取り上げながら ‘le réel’ 概念を理論的に練り上げることを主眼とする。そして第 II 部では Gérard de Nerval の作品を取り上げ、彼の作品中にこの概念がどういった形で現れているかを考察する。Nerval は 19 世紀後半にプルーストにより発見され、20 世紀に於いてシュールリアリストたちによって新たに再評価を受けた天才詩人・作家である。彼は主体の探究という形で作品を通してこの問いを具現化した最も顕著な詩人であったと出ることが出来る。そして筆者もまた「治療とは何か」と問う前に「問いとは何か」と問うことが治療そのものに役立つと考え、本論文を書き記した次第である。

第 I 部 精神分析に於ける欠如の問題

1. 現実性 (la réalité) と現実 (le réel)

そこにあると信じていたのが振り返るとなかったという時、人はそこに何を見るのだろうか。「何もない」ということ？恐らくその時、人は二つの現実と直面しているのである。一つは「そこにはない」という現実 (réalité) と。そしてもう一つは「どこにもない」という現実 (réel) と。一つ目の現実 (réalité) は通常「現実性」と言われるものであり、現実への適応と言う場合の現実はこの現実性にあたる。「そこにはない」という言葉は「あそこにある」という言葉と対を成している。この「そこーあそこ」、「あるーない」という二項対立こそが言語を支えるものである。Freudはこの二項間の差異を糸巻遊びの中に見出している。彼の観察したのは母親が不在になるとき糸巻を取り出し、それを寝台の向こうへと投げ込むときは 'Fort' と、そしてそれを引き出したときには 'Da' と叫ぶのである。この遊びに対する Freud の解釈はこうである。すなわち、その子供は母親という愛する対象の現前と不在という苦しくも避け難い経験を一つの遊びへと象徴化することによって、それを支配し楽しむようになったのである。だが、Lacan はその解釈にもう一つの要素を付け加えている。それは、この糸巻遊びが「声を口にしながら」行われるということである。そこで重要なことは、その発音上の対置 (Fort/Da) に於いて、そもそも言語の最初の現れが見られるということである。「子供が対象を追い払うのは対象が目の前にある時であり、対象を呼び寄せるのは対象が目の前にないときである。この最初のシーソーの揺れを介して、対象は言語の次元へと自然に移っていきます。象徴が出現し、対象よりも重要なものとなります。」(Lacan 1954 P30下) 現前と不在という現象を越えて象徴の次元と関わること、それは対象の象徴的な次元での破壊を意味している。つまり実在しているものを象徴的に破壊し、無

効にする限りにおいてのみ、人間的世界という現実 (réalité) が、象徴的次元の中で構成され得るのである。

ここで象徴化という問題についてもう少し吟味を加える必要があろう。人間に於ける象徴化の現れは、我々が数を数えることができるということに帰着させることができる。我々は誰しも「リンゴ3つ+ミカン4つ=7」という算術を理解することができる。もしも個々のリンゴなりミカンなりにこだわってしまうならば、この計算は理解し難いものとなる。そもそも自然数を成立させているものは個々の対象ではない。それはリンゴという言葉自体にも言えることである。数なり言葉なりが指し示しているもの、それは「何かがある」ということである。その「何か」をここで「存在」と置き換えても差し支えはない。そして自然数に於いてその「何か」を指し示す表象は0であり、この0という表象こそは最も純粹な意味でのシニフィアンと言えるものである。

シニフィアンとは0のように表象対象をもたない「記し指すもの」のことである。この用語は周知のように Saussure によって定式化された用語である。Saussure は言語の機能をシニフィアンとシニフィエ (記し指されるもの) との二側面に分けることによって、記号それ自体、すなわちシニフィアンが独自に記号的価値を有するのではなく、記号システム内に於ける他のシニフィアンとの差異によってのみ意味を生み出す力を与えられることを主張したのである。しかしながら、Saussure に於いてシニフィアンとシニフィエは完全な形で分離されていたわけではなかった。彼はただシニフィアンとシニフィエとの間の何らかの自然的結びつきを否定し、シニフィアン内部での言語記号の恣意的な結びつきを提示したに留まったのであった。

それに対して Lacan がシニフィアンへと加

えた操作はシニフィアンとシニフィエとの断絶を決定付けるものである。次のシニフィアンの定義は Lacan のテキストの至る所に見出される。「シニフィアンは、対象へと回付されることのない記号であり、それは対象の痕跡にすら回付されることのない記号です。」(Lacan 1956 P15下) 痕跡とはいわば砂浜に残された足跡のようなものであり、それはまだそれ自体で対象の本質的な特徴を告げている。一方、シニフィアンはそれ自体で何かを意味するものではない。シニフィアンは対象との結びつきが希薄になればなるほど真のシニフィアンと言えるものになる。またそうであればそれは破壊しがたいものになる。そしてなおかつそれは他のシニフィアンと対をなし、他のシニフィアンに対置されることによって構造化され、意味を算出するものとなるのである。

0が純粋なシニフィアンであるのはそれが固有の対象を持ち得ないからである。一つのリングと1という数はいまだ対応関係を残してはいる。しかし、1という数を数の体系内部で理解するとき、固有の対象をもちえない0という数の存在は数の体系が対象からの完全な抽象化であることを決定付けているものではないだろうか。0はいわばないものをあらしめる象徴の代表であって、それは「何もない」ところに「ない」を刻みつけることによって、無を「ある」へと変換させる機能を持っているのである。したがって「ある」に対応するシニフィエは究極的には「ない」に対応するシニフィエ、すなわち「何もない」、無なのである。Lacan のいう現実 (le réel) とはこの0に対応するシニフィエー象徴体系の外にあるという意味ではシニフィエーと言うことすら許されないような究極的シニフィエーであり、それは象徴世界に取り込まれえないという意味に於いて一つの欠如として定式化されなければならない「何ものか」で

ある。そして欠如の世界としての現実は『「ない」がある』として構成される現実性の世界から考察されなければならないのである。

2. Lacan に於ける欠如の問題

(1) 想像界に於ける欠如

Lacan に於ける欠如の問題は二つの次元に関して論じられている。一つは想像的な次元での欠如について。そしてもう一つは象徴的な次元での欠如について。Lacan の想像的な次元 (l'imaginaire) は想像界と訳されるのが普通であるが、彼の提唱した鏡像段階理論はこの次元のいわば代名詞として広く知られている。Lacan の鏡像段階論は、生後六ヶ月になる幼児が鏡に映った自身の像との関係において自分を構造化していく過程を理論化したものである。幼児は始め鏡に映った自分自身の像に関心を示さない。しかし、徐々に幼児はそれが自分自身の像であることに気が付きだし、そしてその幼児は—まだ他人や補助具の助けを借りなければ一人で立つこともおぼつかないにもかかわらず—突然、はしゃぎながらこれらの支持具の拘束を乗り越えて、鏡の前で鏡との対称的な運動を反復しながら、その瞬間的なイメージを固定しようとする。

Lacan はこういった一連の行動を人間の始源的無力さと結び付けて論じている。すなわち、幼児がイメージへと否応なく籠絡されていくのは、人間がその出生時に於いてある種の胎児状態で生まれてくるからなのである。そういった発達の遅延の故に視知覚の早期成熟は一種の先取り状態を持つようになる。このことは感覚—運動的な協応がまだないにもかかわらず、幼児は早くも生後十日目から人間の顔に魅了されるという視知覚的な認知の優位からも明らかである。そして、そこから幼児の鏡像との同一視の可能性と重要性を論じることが可能になるので

ある。

そもそもこの鏡像段階論は自我の機能を明らかにするために論じられたものである。Lacanによる次の考察は自我の機能を要約したものと言える。『一方では自我の機能は他のあらゆる生き物にとってと同様、人間にとっても現実の構造化という点で基本的な役割を果たしています。もう一方では自我の機能は、人間の場合、自分自身の反射された像「Ur-Ich（原-自我）」、自我理想のもととのフォルムであり、他者との関係のもととのフォルムが構成する基本疎外を仲介としなくてはなりません。』（Lacan 1954 P202上）この自我の機能の分割は非常に重要なものである。何故なら、この分割は主体が自我に対して持つ両極の関係を表しているからである。第一の機能に於いて、未だ混乱状態にある主体は自我を仲介として纏まりをもった身体像を獲得する。ここで纏まりをもったものとして主体の前へと出現する身体像は、主体自身の鏡に映った身体像（原自我）であると同時に他者の身体でもある。他者の所にある纏まりをもったその身体像は主体が鏡の前に見ているものとそっくりであり、その像の活動が自分のものより少々完全で、かつ総合しているために、それは主体にとって理想的な像として現れる（理想自我）。混乱した現実的な身体感覚しか知らない主体にとって、その像は魅力的なものとして眼に映り、その像の魅了的な性質の故に第二の機能、すなわち基本疎外が生じてくるのである。像によって魅了された主体は自身と像とを同一視しはじめる。ここで像と呼ぶものは主体の身体像だけに止まらない。それは他者の身体像（理想自我）をも含むことになる。そこから主体の他者との取り違いといった現象が生じてくるのである。たとえば、「ぶった子がぶたれたと言う」といったことが起こる。同様な現象として、同年代の似た幼児

が母の胸に、即ち子供にとっては必要不可欠な欲望の対象にすがりついているのを見たときに覚える嫉妬などがあげられる。

Lacanはこの次元に於いて欲望は想像的關係の中でのみ、すなわち他者へと投影された形でのみ存在していると言う。「このような関係の中では、主体の欲望が確認されるのは競争によって、つまり欲望の向かう対象に関する他者との絶対的な競合によってだけです。そして私たちが、主体におけるこの原初的疎外に接近するたびに、最も根源的な攻撃性が見えてきます。つまり他者が主体の欲望を担っている限り、その他者を消し去りたいという欲望が現れるのです。」（Lacan 1954 P17下）このように幼児は他者のところで自己の欲望を発見する。この原-自我と理想自我との間に生ずる欲望を巡った弁証法こそが、自我と呼ばれる想像界のステージとなるのである。原-自我と理想自我との同一視は幼児に他者を欲望させるだけに止まらず、他者自身の欲望を幼児の欲望とさせ、また他者の欲望を欲望させもする。しかし、他者の欲望を限りなく捕らえようとする幼児の要請が満たされることは決してない。「主体は、この他者の欲望が自分自身の欲望であることを決して把握することはできないでしょう。何故なら彼自身の欲望は他者の欲望なのですから。彼が追求しているのは彼自身なのです。」（Lacan 1954 P97下）ここには嫉妬のドラマを生み出す素地がある。他者の中に自己の欲望を見ることはその欲望を自分のものにするための他者との闘争を生じさせるが、その闘争の終結は究極的には自己の欲望を奪い取った他者を現実的に破壊することで決着がつくことになる。しかし、そこに逆説が生ずる。それは自己の欲望が他者の欲望である限りに於いて、他者の現実的破壊は欲望の消滅をも意味しているという逆説である。

こうした欲望の問題との直面は、幼児を欠如の前へと立たせることになる。像を通して主体を統合しようとする試みは、そのためにかえって欠如を際立たせる結果ともなる。幼児は他者を通して自己の欲望を知ることによって己の欠如をも知るのである。欲望とは主体の欠如の現れであり、自我という像はその欠如に取り込むことが出来ないが故に、自我に開いた穴を埋めようと主体は闘争を強いられるのである。しかしながら想像界に於けるこのような弁証法的袋小路は鏡像段階では出口を持たないのである。

(2) 象徴界 (le symbolique) に於ける欠如

鏡像段階の出口は像の裂け目から、すなわち口から現れる。Lacan が定めた鏡像段階のリミットは生後一歳半（十八ヵ月）である。この年齢は Freud が観察した糸巻で遊ぶ幼児の年齢と一致している。Lacan はこの時期について次のように述べている。『人間においては、欲望は他者の中で、他者を介して、他者の所で現実化されます。それこそが第二のとき、鏡像的な時、主体が自我のフォルムを統合するときです。しかし主体がこの自我を形成するためには、その前に自我を、彼が他者の中に見る欲望と交換する最初のシーソーの揺れが起こらなければなりません。この時から、他者の欲望—（略）—は言葉による間接化作用を受けるようになります。欲望が名づけられるのは、他者の中で、他者を介してです。欲望は、「わたし」と「おまえ」という象徴的關係へと、相互承認と超越より成る関係へと、どんな個人をも含み込むだけの準備を備えている掟 (loi) の次元へと入っていくのです。』（Lacan 1954 P29 下）

他者を介した欲望のシーソーは、まさにシーソーという弁証法的な動きを介して象徴的な出口を見つけることになる。この象徴化への動きが Freud の糸巻遊びと同時期に生ずるのは偶然ではない。彼が観察した幼児の「Fort/Da」

はLacan がここで言う「わたし／おまえ」の対立と同じ機能を果たしている。それは想像的な次元に於いて自我が同一視する他者の現前と不在が幼児にとってはまさしく自己の消失として感じられるからである。象徴界へのこうした参入は前述したように対象の象徴的破壊をも意味している。それ故 Freud の観察例に於いて糸巻であったその対象は母親であると同時に幼児自身でもあると言うことが出来る。

対象との結びつきが緊密であればあるほど象徴界への参入は困難なものとなっていく。Laing は病理学の観点から実存的—現象学的にその困難を浮き彫りにして見せた。彼は精神分裂病質者を「真の自己」と「にせの自己」との分裂として描きだしている。「分裂病質者のにせ自己は、自己の実現や満足のための媒介物として役に立たない。分裂病質者では、にせ自己が一見性的に適応しているように見える場合でも、自己の方はもっとも素朴な意味で飢え渴いたままでいるのである。」(Laing 1960 P127) Laing の言う「(真の) 自己」が主体を意味していることは明らかだが、その主体にとっての困難は彼が自身を仮面と同一化することができないということに由来する。主体が仮面と同一化することはある種の疎外を意味している。「彼が鏡の中で見ることの出来た〈人間〉は、彼自身の自己でもなく他人でもなく、単に自分の映像にすぎなかったけれども、鏡の中にもう一人の自分自身の映像がみえなくなったとき、彼自身も消失したのだ。」(Laing 1960 P157)

この消失感母親という対象が不在のときも同様に生じてくるように、対象を象徴化出来ぬ限りに於いて対象の不在は自己の消失と同じものとなる。そしてこの消失感主体に像との同一化を余儀なくさせることになる。しかし「単に自分の映像にすぎない」像との同一化は、鏡像段階のような真に弁証法的な他者との競合を生

み出さず、したがって「わたし」を「あなた」に対立させることによって自身を言語の次元へと導くことも出来ないのである。こうして築き上げられた「にせの自己」はあたかも自分であるかのように振る舞い、行動する者となるが、そこに主体との本質的な分裂が根ざしているという事実は彼を次第に孤立させていく結果を生む。

Laingはこの著書で眼差しの問題に固執する。幼児が暗闇を怖がる理由を彼は眼差しの問題と結び付けている。この考えは幼児の存在が母親の現前に於いてその眼差しによって支えられているという考察から来るものである。この考察は彼の著書が<引き裂かれた自己>たちに関する現象学的な視点からの記述に基づいているということから理解することが出来る。逆に言えば、このことは彼らが象徴化という問題からことごとく距離を取っているということを示しているとも言えるだろう。確かに眼差しの問題の重要性は指摘するまでもない。しかし、象徴化という問題に於いてより重要になってくるものは眼差しではなく声である。「Fort/Da」という叫びとともに幼児はその対象たる自己を象徴的に破壊し言語の次元へと移行することになる。

こうした鏡像段階の終局に於いて現れる象徴界への移行という現象は、しかしながらそれによって全てを解決する訳ではない。鏡像段階で明らかになる欠如の問題は象徴界に於いて「問い」という形を取るようになる。そしてこの「問い」は象徴界に於ける欠如の現れである。

鏡像段階に於ける袋小路は欲望を中心とする想像的な闘争の末、最終的に対象を現実レベルで抹消するという決着を見出すことになる。そして想像界での対象の抹消は必然的に相討ちの結果となる。すなわち主体は欠如を埋めようと試みるが、その結果、いわば彼自身が欠如と

なってしまうのである。これを「真の自己」を目指す試みと捉えることも可能であろう。なぜなら純粋に想像的な次元 — それがあると仮定しての話だが — に於ける「真の自己」への到達は、鏡像段階以前の主体、すなわち「ばらばらに分断された身体」へと回帰することと同義だからである。そして想像界に於ける「破壊」を中心としたこの欠如と主体の関係は、象徴界に於いて「問い」という形で再び浮かび上がることになる。

象徴界には「何ものか」が欠けている。それは0という純粋なシニフィアンによって消された何かである。この欠けた「何か」はシニフィアンの次元に於いて必然的に「なぞ」という形のまま残される。それ故現実性の次元に生きる我々は常にこの「なぞ」を背負って生きているはずである。したがって、人間が現実性の世界に適應していられるのは、この「なぞ」を問うことを禁止されている限りに於いてである。シニフィアンにとって謎であるもの、欠如したものの、問われ続けなければならないもの、それはすなわち主体である。「要するに、本性上シニフィアンの中に吸収することの出来ない何かがあるということです。それは、まさに主体という奇妙な実在です。それは何故そこにあるのでしょうか。どこから出て来たのでしょうか。何をしているのでしょうか。そして何故それは消滅へと向かうのでしょうか。シニフィアンは主体をまさに死の向こうに据えているのですから、この問いに答えを出すことは出来ません。シニフィアンは主体を既に死んだものと考えているのです。つまりシニフィアンは主体を本質的に不死たらしめているのです。」(Lacan 1956 P37 下)

シニフィアンが主体を既に死んだものとするのは、死というシニフィアンが本質的に純粋なシニフィアンだからである。象徴界に住まう人間が死を知りえないのは死のシニフィエが文字

通り「シニフィエの外 (le hors-signifié)」に位置するからである。翻って考えれば、シニフィアンの世界、すなわち象徴界は完全なる父死の世界だということになる。しかしながら、人間の住まう象徴界は本当に完全なる不死の世界なのであろうか？ 全てのものは象徴界の網の中でのシニフィアンの戯れにすぎないのであろうか？ 人生とはまさしく夢の如きものでしかあり得ないのであろうか？ しかしそもそも誰が、一体何のために夢を見るのであろうか？ 今はしばらくこの問いに答えることを差し控え、ひとまず Freud へと立ち返ってみることにしたい。

3. Freud に於ける欠如の問題

Freud 理論に於いて、欠如の問題はかなり初期から論じられている。我々はその発端を「草稿」と呼ばれる初期の論文に見出すことが出来る。Freud がこの「草稿」を書きはじめたのは1895年である。この論文はもともと出版を意図されたものではなくただ唯一の読者フリース宛に書かれたものであった。それ故、この原稿が出版され「心理学草稿」或いは「科学的心理学草稿」のタイトルで呼ばれるようになったのは1950年、すなわち Freud の死後であって、執筆当時の Freud はこの原稿を「 ϕ の理論」、「ノート」などと呼んでいたようである。しかし、この原稿で展開される問題は「夢判断」の第七章で再び取り上げられることになり、また、その後の精神分析の理論化の問題と不可分に結びついていくが故に、Freud 理論の根底の理解と重大な関わりを持っているということが出来る。

この論文の中で欠如の問題は快感原則によって支配される心理的な場に於ける「内」と「外」との分割という形で表されている。ここでいう心理的な場とは Freud が仮設したニューロンモデルのことであり、そこを支配す

る快感原則はそこではニューロン惰性の原理と呼ばれている。これはニューロンは自ら量 (Q) を失おうとする傾向を持つという原理である。すなわち、これは感覚ニューロンによって感知した内的外的量 (Q) を運動ニューロンによって速やかに放出する過程である (一次過程)。量 (Q) の原因が外的である場合は、この一次過程による知覚→放出の過程によって、ニューロンは刺激から開放された状態を維持することが出来る。しかしニューロンシステムが内因性の刺激 (飢餓、呼吸、性欲等) を受け取る場合は、外的な刺激のように刺激源泉から遠ざかることが出来ず、また量 (Q) を刺激逸走に振り向ける事もできない。したがってその刺激が止むのは、特定行為 (Spezifische Aktion) によって一定の諸条件が外界で実現された場合に限られる。こうして生体は量 (Q) の放出とそれによる量 (Q) の水準 (0) への根源的な傾向を放棄することを余儀なくされる。なぜなら、「特定行為の必要条件を満たすために、ニューロンシステムは量 (Q) の貯蔵の維持を甘受させざるを得ない」(Freud 1896) からである。そして、ニューロンシステムは水準零への傾向から、せめてこの維持量 (Q) をできるだけ低くし、その増大を防ぐ、すなわちこの量 (Q) を一定に保とうとする努力へと姿を変えていくことになる (二次過程)。

こうして生体は内部からの刺激—Freud はこれを生の欠乏 (Not des Lebens) と呼んでいる—を満たす必要に迫られるようになるが、そのためには外界の情報を蓄える記憶のメカニズムが不可欠となっている。そこで Freud は「接触防壁」という仮設を建て、ニューロンの種類を二種類に分けることを提案する。一つは、量 (Q) の通過後に元の状態に復帰するニューロン ϕ であり、もう一つは量 (Q) の通過後には変形してしまうニューロン ψ である。

Freud は一つの ϕ ニューロンと他の ϕ ニューロンとの接触点に、ある種の障壁を仮定する。そして、その障壁は量 (Q η) の通過に際して、それを妨げるような抵抗を示すのである。つまり、量 (Q η) のニューロン間の伝達は未分化な原形質を通して行われ、その後は伝導過程そのものによって原形質に分化が生じ、同時により遠くへの伝導のための、より高い伝導能力が作り出されるのである。Freud は量 (Q η) 通過後の ϕ ニューロン間での伝導能力の度合いを疎通 (Bahnung) の度合いと呼ぶが、それによって記憶は ϕ ニューロン間の疎通の差異という形で表すことができるようになる。すなわち、ニューロンは、外界からの刺激を接触防壁によって吸収しながらニューロン間に疎通を作り上げ、量 (Q) を無数の量 (Q η) へと分化し、かつ差異化していくのである。

これは幼児の最初の充足体験を例にとりてみると理解しやすい。生の欠乏に駆られた幼児が最初に充足を与えられるのは通常母親によってである。その時幼児は最初の知覚像を充足をもたらした像として ϕ ニューロン内に差異として記憶する。そのとき記憶された知覚像を仮に a-b と言う知覚複合体とする。すると、幼児が再び願望状態となった時、幼児は最初の満足を得るために再び a-b という記憶像へと備給を行うことになる。しかしながら幼児がその時目にするものは知覚に似た何か、すなわち幻覚である。特定行為によって一定の諸条件が外界で実現された場合にのみ生の欠乏から生じる量 (Q η) の放出が行われるのであってみれば、幻覚という記憶像への備給によって量 (Q η) の放出が生じることはあり得ない。そこで幼児は外界の中に再び最初の対象を見出そうと試みる。すなわち外界から来る新たな知覚像といま同時に願望補給されている記憶像との突き合わせを行うのである。この時、仮に知覚像が

記憶像と全く同じ a-b 複合体であるならば、知覚像への備給によって速やかに量 (Q η) の放出が行われることになる。しかしながら、その知覚像が a-c 複合体であるならば、幼児はそれが外界からの知覚か否かを判断することを迫られる。すなわち、類似性をどのように同一性にまで完成させるかが量 (Q η) 放出の鍵となるのである。

私は今二つの表象複合体を例にとったが、Freud はこの二つの表象複合体に於ける共通要素 a に関して次のように述べている。「このように身近な人間の複合体は二つの構成要素に分けられる。その一つはその恒常性のある組織体によって印象づけられ、物 (Das Ding) として現にそこにある構成要素である。」(Freud 1896 P266) すなわち a という知覚要素は身近な人間の現にそこにある普遍的な構成要素のことである。この要素 a は、知覚対象が現実中存在することを示す要素であり、それが現実の指標となる限りに於いて、知覚対象を幻覚から隔てるのが可能となるのである。

このようにニューロンモデル内での判断を伴う思考過程は、常に自己自身の知覚を通して知覚対象の中にある普遍部分 a を見つけ出そうとする作業である。「現実吟味の目的は一にも二にも、表象されているものに照応する一つの客体を、現実的知覚の中に見出すという事ではなくて、それを再発見し、それがまだ存在していることを確認することなのである。」(Freud 1925 P360) ここでいう客体とは物 (Das Ding) のことである。そしてこの物 (Das Ding) の存在に関わる判断の元となるのが要素 a である。しかしながら、要素 a が表象として内部、すなわちニューロンモデル内に取り込まれたものである限り、それは物 (Das Ding) ではない。それ故、要素 a は ϕ ニューロンの核に於いて外を繋ぎ留めた内として機能し続けている

のであり、その際、物 (Das Ding) と呼ばれるものは「判断を免れた残滓」なのである。

この Freud の考察から要素 a が 0 と同様シニフィエを持たない純粋なシニフィアンであることが理解できるであろう。Freud はここでどのように原初的且つ純粋なシニフィアンが物 (Das Ding) と呼ばれる「何ものか」と結びついているかを示しているのである。この「何ものか」は生の欠乏者であり、また量 (Q) の源泉であるともいうべき主体であり、絶対的な他者であるような他者の主体であり、それはすなわち象徴界の中心に於いて内部に繋ぎ止められた外部に位置する主体である。この主体は要素 a を是認し、自己を物 (Das Ding) と化すことにより象徴的主体となる。そして自己を物 (Das Ding) と化すことは、自己を象徴界から排出された残滓とすることを意味している。仮に主体が要素 a を飽くまで拒絶し続けるならば、主体は「真の自己」と「にせの自己」とに引き裂かれる。その時言表行為 (énonciation) を行う者としての主体と言表内容 (énoncé) 内部で表される「わたし」としての主体との間には決定的な裂け目が生じることになる。

主体を名付けその名を受け入れること、それは主体を死んだものとするのである。しかしながら、それによって象徴化された主体は自己を名として永遠のものとするようになる。それは賭といってもよいが、どちらにとっても勝ち目のない賭である。シニフィアンは無限に連鎖する。象徴化された主体はその連鎖の中を換喩として永遠に流れつづけて行く。「アンナフロイト、苺、すぐり、オムレツ、お父様。」(Freud 1900 P111) これは Freud が報告した彼の娘アンナフロイトの生後十九ヵ月に於ける夢(寢言)であるが、この自分自身の名から始まる夢の中での換喩的ズレは名としての主体が象徴界を流れて行く様を端的に示した例と言える。

この流れは止まらない、止まるはずもない。仮に止まればそれは嘘となる。なぜなら、象徴界に存しながらに失われた主体を取り戻すことなど不可能だからである。こうして主体は語り続ける。しかし「一旦は象徴界の中にありながら、何らかの偶発事が象徴界への主体の接近を妨げる」とき、この欠如の存在は「問い」という形で再び現れる。そして神経症では常にこの「問い」が症状として現れるのである。

症状とは欠如への問いである。精神分析に於いてファルスが問題となるのはそれが「ある／ない」というシニフィアンに対応するからである。ファルスを象徴化すること、それはファルスそのものを象徴的に破壊することである。それを Freud は去勢と呼ぶ。それ故「男性／女性」の違いを問題に出来るということは既に去勢を受け入れていることを意味している。しかしながら、「男性／女性」というシニフィアンが「ある／ない」というシニフィアンと同じものであるために、「女とは何か？」という欠如への問いは開かれたまま残され続ける。また、更にこの問いはシニフィアンのレベルに於いて「生／死」という対立とも重なり合うことになる。そしてこの欠如、この者 (Das Ding) と以外言いようのない「何ものか」、そして象徴化された主体が本来在ったと事後的に仮定されるこの場、これこそが内に繋ぎ止められた外であり、また「ない」、「女性」、「死」といった原初的なシニフィアンによって本質的に謎という形でしか表されようのないもの、すなわち 'le réel' という概念の内に Lacan が定式化しようとしたものなのである。

第Ⅱ部 Nerval に見られる物の現れ

Gérard de Nerval は本名を Gérard Labrunie とする。彼は1808年5月22日ナポレオン

大陸方面軍軍医補をしていた Etienne Labrunie とコキリエール街の衣料品商の娘 Marie - Antoinette - Marguerite Laurent の間に生まれた。この Nerval という筆名は彼の祖父が Nerval の母の祖父と共に耕していた「茂み」と呼ばれるヴァロワ地方の草むらに囲まれた畠からとったものである。その囲い地は古代ローマの陣営の旧跡で、十代目の皇帝の名 (Nerva 帝) を残していた。Nerval は彼の祖父母がこの土地で結びついたエピソードを「散策と回想」中の幼年時代と題された章でユーモアを交え語っているが、この結びつきからやがて Nerval の母が生まれることになる。それ故彼の筆名は彼の母がこの世に生を受ける端緒となったこの土地に因んで付けられたものようである。また Nerval という筆名は彼の母 Laurent を裏返したものであり、更には父 Labrunie の姓の中にも同様に n-e-r-v, (u)(b)-a-l を見出すことが出来るという指摘もある。

Nerval の母は彼が二歳半の時に亡くなっている。Nerval の父はシレジアのグロゴーの野戦病院の指揮にあっていたのだが、夫に付き添いこの地を訪れた彼女は、そこで伝染病に罹って死んだのである。彼の父は、その後モスクワ遠征軍へと編入されるが、ペレジアの河の流れの中に彼女の手紙や宝石類までも失くしてしまうことになる。そして Nerval はこの父とは永遠に和解することが出来なくなる。また Nerval は後に母についてこう語っている。

「私は母を見たことがない。その肖像は失われたか、盗まれたかしてしまっただけだ。私はただ、母が、ブルドンとかフラゴナルかの原画による「内気」という題の、当時の版画に似ていたということだけを知っている。」(Nerval 1966b P308) それ故、彼は版画を通してしか母を知らないのである。Nerval の作品は、

とりわけ彼の後期に於いてはほとんど全てのものがこの母を再構成しようとする動きに支配されていると言っても過言ではない。その作品とは「シルヴィー」、「幻想詩編」そして「オーレリア」である。前の二作品は共に「火の娘たち」の中に収録されたものであるが、こうした彼の傑作と言える作品は彼の死の直前の五年間の内に書き上げられている。

Nerval は1855年1月26日にパリはヴィエユ＝ランテルヌ街の狭く汚い裏路地で縊死している。筆者はここで彼の作品の中から彼の死の原因を探ろうと試みるつもりはない。しかしながら、Nerval は「自分の想像力が生み出した人物と自分自身とを合体させずには、何も作れないような者」(Nerval 1966c P7) であった。ここには Gérard Labrunie と Gérard de Nerval とを同一線上で考える根拠が述べられている。「現実生活の中への夢の氾濫」を体験記的に記した作品「オーレリア」はその副題に「夢と人生」という言葉が当てられているが、この夢と人生の交錯は「シルヴィー」においても同様に現れている。「シルヴィー」に於ける交錯、それは回想と経験の交錯である。

この作品は過去と現在を縦横無尽に行き来する。そこでは過去のシルヴィーと現在のシルヴィーとを重ね合わせようとする努力が行われる。彼は現在パリで女優に恋をしている。その女優の名はオーレリーという。彼は彼女を目にするために毎夜劇場に通いつめている。だが、彼が目にしていない女優は一人の女と言うよりも、むしろ幻影である。「ぼくが追いつめているのは、心の中の面影さ、それだけなのさ。」(Nerval 1966d P130) この面影が彼の母であるかどうかを今問題にすることは避けたい。ただ小説の中に於いてはこの面影はアドリエヌという一人の修道女なのである。「田舎の花束祭 - 明日サンリスの射手たちは……」という新聞記事

を彼が目にした時、突然オーレリーから幼児時代の二つの恋へと彼の記憶は遡行する。そしてその恋がアドリエヌとシルヴィーへの恋である。

Nerval は夢現の境である思い出を回想する。それはシルヴィーと共にいったヴァロア地方の祭りでのことであった。そこで彼はアドリエヌと出会い、そしてシルヴィーを失うことになる。しかし、アドリエヌは実在する人物というには余りにも微かな映像でしか現れない。何故なら、彼女はその日を境に修道女となる運命にあり、彼も二度と彼女と再会することは一夢の中を除いてないのであるから。彼はその後パリへ帰るが、彼がヴァロワから持ち帰ったもの、それは「悲しくも破れ去った友情」と「苦しい思いの源になった漠としかかなうあてもない愛」との二重のイメージであった。

彼はこの回想を通してある思いに行き当たる。「女優の姿の下で修道女を愛しているのだ！……そして、もしこれがまったくの同一の女性だったとしたら！—そこには人の気を狂わさんばかりのものがある！」そこで彼はこの言葉を裏付けるように自分にこう呟く。「いけない、現実に立ち返ろう！」こうして彼は理想の愛へと引きずり込まれそうになりながら、自分を現実へと立ち返らせようとする。そしてこの現実がシルヴィーなのである。しかしながら、シルヴィーは彼を現実へと繋ぎ止める事は出来ない。なぜなら、いみじくも Georges Poulet がそのことを指摘しているように、彼が探しに行こうとしている現実はまだに思い出の中の現実だからである。「Gérard のこの幼な友だちはたしかに実在するが、それはまだ、思い出の状態であるにすぎない。回想の情景が実在するように彼女は実在するのだ。」(Poulet 1966 P37)

彼はロワジーへと向かう馬車の中で、城館の

前でアドリエヌと出会った時のことがもう幼年時代の一つの思い出でしかなくなっていた頃の、シルヴィーとの再会の思い出へと沈んでいく。そしてそこで美しいシルヴィーと出会うのである。「彼女はすばらしくなっていた。子供の頃からあんなに人をひきつける力のあったその黒い眼の魅力は、もはや逆らいがたいまでにならなっていた。」この回想の中でシルヴィーは二度までもアドリエヌに打ち勝つ力を持っている。しかし、ロワジーへと到着する直前に、アドリエヌの幻は再び彼の前に姿を現す。彼は「アドリエヌの出現も本当の事をだっただろうか？」と自問しながらその「夢幻の世界から逃れ出る」ためにもシルヴィーと会うことを切望する。

ここで回想は終わり、彼は現在のシルヴィーとの再会を果たす。しかし、彼は彼女が変わってしまっていることを知る。それを知るのは彼女の歌によってである。「ああ！きみの歌うのが聞きたい！……きみの良い声がこのドームに響いて、私を苦しめているあの精霊を追い出してくれたらな……」この精霊がアドリエヌであることは言うまでもない。だが、彼女はもう昔のように古い民謡を歌わなかったのである。否、彼女はまだそれを歌うことも出来たのだ。しかし、彼が回想と現在とを繋ぎ合わせようとした瞬間、彼女が彼の乳兄弟と婚約していることを知らされるのである。そしてそれを知った彼は再びパリへ、オーレリーのいる街へと引き返すことを決意する。

彼がパリへと引き返したのは現実のオーレリーと再会するためである。そして彼は彼女に二通の手紙を出す。彼は「自分の理想を獲得し、不動のものにしたいがため」にそうするのである。だがこの言葉が夢と現実とを三度結び付けようとする試みを意味するものでなければ、一体何を意味するのだろうか？彼は彼女をアドリエ

ンヌと出会った場所へ連れて行き、彼女への愛の由来を物語る。そして彼女は彼の恋がドラマでしかないと言い放つ。「その言葉は稲妻のように私を打った。あんなに長い間感じつづけて来たこの奇怪な熱狂、この夢、この涙、この絶望、そしてこの優しい仕ぐさ……はたしてこれが恋ではなかったのだろうか？では恋とは一体何処にあるのだろうか？」彼は自身の問いに答える術を知らない。ただ、次のような教訓めいた言葉によって自答しようとするかに見える。「これが、人生の朝に人の心を魅惑し迷わせる悪夢である。……幻想は果実の外皮のように一つ一つ落ちていく。その中から現れる実、それが経験というものだ。」そして最後にアドリエヌが既にこの世にいないことが、今や二児の母となったシルヴィーの口から知らされてこの物語は終わるのである。

この作品全体を見渡してみれば、Nervalがいかにも夢と現実、回想と経験とを結び付けようと試みているかが、そしていかにそれが絶望的な努力としか成り得ないかが理解できるであろう。彼はオーレリーを現実の女性として見ようとする瞬間に於いてさえ、彼女をアドリエヌの面影と重複させずにはいられない。そしてそのアドリエヌは既に永遠に失われているのである。ではシルヴィーはどうであろうか。彼女はNervalを現実へと繋ぎ止める最後の架け橋であったといっても良い。しかしながら、シルヴィーは現実には止まることが出来なかった。そして彼女が夢の中へと消え去って行くにつれ、オーレリーの主題、すなわちアドリエヌの主題が現れ、それは「オーレリア」の中で更に苦難の途へと彼を誘うことになるのである。「以下にオーレリアという名で呼ぶ、私が長い間愛した婦人は、私にとって失われてしまった。」(Nerval 1966e P6) こうしたオーレリアの喪失感とは彼にとって世界の消失をも意味してい

る。彼がオーレリアとおぼしき婦人と夢の中で出会った時、彼は彼女にこう叫んでいる。「おお、逃げないでください……自然があなたと一緒に滅びてしまいますから！」

シルヴィー、アドリエヌ、オーレリー、そしてオーレリア。この一連の女性名は全て失われた対象を表すシニフィアンとして用いられていることを今や見逃すわけには行かないであろう。彼は「失われた文字或いは末梢された記号を再び見出し、不協和の音階を組み立て直そう」(Nerval 1966e P35)とする試みを作品を通して行っているのである。そしてそれが「精霊たちの世界に力を獲る」ための試みであると彼が言うのは、恐らくそれが他者の中に失われたもの、すなわち物(Das Ding)へと辿り着く道であると彼が感じていたからである。彼のこの女性の名を用いた文字探しは、彼の詩に於いては彼自身の換喩として表されている。(Nerval 1966a P6)

「私は冥き者、一妻なき者、一慰めなき者
崩れかけた塔に住む、アキタニアの君主」
ここで一旦主体が確定されたかに見えるが、
「私は愛神か光神か、キプロス王かヴァロワ
公か、」(幻想詩篇「廃嫡者」より)
という懐疑的詩句へと繋がることによって彼が自分を見失っていることが明確にされるのである。この詩句は彼の主体探しを明示しているが、これは女性名についても同様のことである。この女性名と主体名との関係は「妻なき者(le veuf)」に良く現れている。この部分は彼の草稿では「故実、マウソロス?(olim:Mausole?)」となっている。マウソロスはアルテミス(Artémise)の夫であり、伝説ではこのマウソロス王が死にアルテミスが悲しむという話になっている。それ故本来ならば「夫なき妻(une veuve)」であるべき所をNervalは敢えて自分と重ね合わせる為にも「妻なき夫」としたの

である。この重ね合わせは「幻想詩篇」に収録された「アルテミス」を 'Artémis' と女性形の 'e' を省いて書き記していることから明らかである。そしてこのことから彼の女性との同一化を導き出すことが可能となる。Nerval はこうした女性との想像的同一化によって女性のシニフィアンを獲得しようと試みる。しかしながら、この固有名詞の積み上げは「一人に対するこの不可能な命名を、次にその細分化を、そして結局名付けえぬ物という曖昧な領域への再旋回を」(Kristeva 1987 P75) 実現することにしかならないのである。

この Kristeva の言葉は Nerval に於ける名と物 (Das Ding) との関係を示唆したものである。彼には物を無化するシニフィアンが欠けていた。彼には原初のシニフィアン、すなわち「女性」というシニフィアンをシニフィアンとして定立することが出来なかったのである。それ故、彼の表すシニフィアンはことごとく女性の香りを漂わせており、そこには常にイメージが介入するのである。また臨床的にはこうしたことを父=去勢者の欠如と結び付けることも可能である。

Nerval の作品はまさに女性名の反復という形を取る。それは彼が象徴界の欠如、失われた対象、すなわち母の象徴化を受け入れられなかったということを意味している。そして彼の創作活動は作品を通して失われた対象を取り戻そうとするいわば絶望的な試みであったと言えることが出来るのではないだろうか。

引用文献

Freud, S. 1900 (1942) "Die Traumdeutung". Gesammelte Werke II-III. Imago Publishing:London. (高橋義孝訳 1968 「夢判断」フロイト著作集第2巻 人文書院 京都)

—— 1925 (1948) "Die Verneinung". Gesammelte Werke X IV. Imago Publishing:London. (高橋義孝訳 「否定」1969 フロイト著作集第3巻 人文書院 京都)

—— 1896 (1950) "Entwurf der Psychologie". Aus den Anfängen der Psychoanalyse. Imago Publishing:London. (小此木啓吾訳 「科学的心理学草稿」1974 フロイト著作集第7巻 人文書院 京都)

Poulet, G. 1966 Trois essais de mythologie romantique. José Corti:Paris. (金子博訳 1975 「三つのロマン的神話学試論」審美社 東京)

Kristeva, J. 1987 Soleil noir. Gallimard: Paris

Lacan, J. 1954(1975) Les écrits techniques de Freud. le Seuil:Paris. (小出浩之訳 1991 「フロイトの技法論上・下」岩波書店 東京)

—— 1956 (1981) Les psychoses. le Seuil:Paris. (小出浩之他訳 1987 「精神病上・下」岩波書店 東京)

Laing, R, D. 1960 The Divided Self. Tavistock Publications:London. (坂本健二他訳 1971 「引き裂かれた自己」みすず書房 東京)

Nerval, G. 1966a Les Chimères, "Les filles du feu." Gérard de Nerval OEuvres. edition de H. Lemaitre. Classiques Garnier:Paris. (中村真一郎他訳 1975 「幻想詩篇 (火の娘たち収録)」ネルヴァル全集 I 筑摩書房 東京)

—— 1966b "Promenades et Souvenirs." Gérard de Nerval OEuvres. edition de H. Lemaitre. Classiques Garnier: Paris. (中村真一郎他訳 1975 「散策と回想」ネルヴァル全集 I 筑摩書房 東京)

— 1966c A Alexandre Dumas, “Les filles du feu.” Gérard de Nerval

OEuvres. edition de H. Lemaitre. Classiques Garnier:Paris. (入沢康夫訳 1975

「アレクサンドル・デュマへ (火の娘たち収録)」ネルヴァル全集Ⅱ 筑摩書房 東京)

— 1966d Sylvie, “Les filles du feu.” Gérard de Nerval OEuvres. edition de

H. Lemaitre. Classiques Garnier:Paris. (入沢康夫訳 1975 「シルヴィー (火の娘た

ち収録)」ネルヴァル全集Ⅱ 筑摩書房 東京)

— 1966e “Aurélia,” Gérard de Nerval OEuvres. edition de H. Lemaitre.

Classiques Garnier:Paris. (佐藤正彰訳 1976 「オーレリア」ネルヴァル全集Ⅲ 筑摩書房 東京)

※引用ページは邦訳のあるものは邦訳の、邦訳のないものは原著のページを記した。